

稻土類後

紀行

十四

僧生  
775  
226



門 4  
冊 775  
巻 226

群書類従巻第百四十

檢校保己一集



紀行部 十四

東國紀行

宗牧

往年宗長老人山崎宗元の著して富士見のりて  
一往いて東國歴魂の事ありしを邦を奉ふ然  
く海京一ありを後毎年の増りて路句  
川一八由なるりりる不定の歌詠の世あり  
あり流きしと不口なる事の中風和め成てあり  
志不備そもありし所なりし由緒ありあまの  
去春のりしよりゆりて一紙送ぬ友中深氏物終

天文十二

植家

秋調の山平出来て夏の日つましくぬそ授合  
津事始りしはきあ終らぬありし事とわが子  
乃のありし物——京都例のありし物とわが子  
河内乃歌出浪の風流ありし物とわが子  
ともはつひしむうめく屋ありし物とわが子  
存分もあ入お平とありし物とわが子  
幼秋の末川ありし物とわが子  
公私とも——山平をうめく半なきは取れ  
病中津氏授合のありし物とわが子  
少人極急なりし物とわが子  
津事——ありし物とわが子

細川晴元

佐々木定頼

尚通

年暮より山中風と換りて山平外の式ありあり  
一白の山平教ありし物とわが子  
概く津養生ありし物とわが子  
津事——ありし物とわが子  
之と道乃義も津きてか——ありし物とわが子  
平生素よりありし物とわが子  
あき——ありし物とわが子  
らひはひし物とわが子  
流むて初夜ありし物とわが子  
あき——ありし物とわが子  
毎日——ありし物とわが子

以遺まう〜わ〜ゆ〜す米乃以物か〜りあゆやうなり  
とせ〜らりもものな〜と〜と〜恭平乃積あまハ依と本  
霜臺下園と〜れお乃以木の以際とあ〜あふわや  
あまハゆ〜ぬ別をわな〜りハふ年母切前〜かふ  
無〜以年も七十と古本ゆまはふ以威光法中  
ら下お乃〜あり以葬れと東橋乃海流流と能  
法〜ハゆ〜好〜あ日た雨の空と終て以と〜り  
ぬき海也と〜ゆり〜るを殿法神房まはぬ茶あま  
うす〜しゆ〜〜ゆ〜つ〜とあ〜りて海ぬう  
ち〜て春前〜勢未乃ぬもゆらハあ〜か〜ゆぬぬ  
く氣色あり以中後母也和は〜と終ハ〜と武乃也

吊山〜と〜所最法花以純淨云三部云外〜と〜り  
くの捧物懐四の終款中〜ゆ〜わ〜り〜法志ま〜る  
神也心〜〜好色と見〜く〜あ〜と〜か〜〜て黄金と〜り  
法〜あふ經冊後澤乃上人乃り〜と〜な〜へ〜るこれ  
切り乃をぬは〜やとね〜て

風まぬあまこれ茶よりと〜すはれと係ふ心乃ぬ〜むを録ハ  
やか〜川〜市〜て智恵光院〜と〜と〜ぬハ以海と終乃  
〜と〜や〜と〜

雲深乃神は川〜あ〜あ〜と〜と〜と〜茶法よ秋乃色成  
とあ〜と〜と〜ある經冊と〜と〜ぬ〜と〜て心あ〜  
ひ〜と〜たり聖旨法花懺法職開山ゆのり〜と〜と〜ハ

此後思ひしつゝ終つておん

去來生滅本難常愁淡難期幾夕陽  
七十三年昔八月梅花薰徹返魂香

かきそ方と思ひしを思ふに秋乃定たり病の夕を  
ゆふふみあめもかりきあへく久病者き極成下し此  
金玉乃和顔丑山情僧を影くいやしくゆく希相  
法人といはれうすあはれけりし乃ゆく所ふまか邊  
ゆり

おとせの二箇ありあはれ秋風の憂吹く寸春は梅く  
ちりて昔意をゆたり又道増難護流乃尚道推后後法成与敬  
い海は乃沖流又

遠くゆ人そははれ秋くあはれ獨毛跡をたりあき世又  
是をゆ乃そははれとて三十一首白くふふあふ  
む乃あはれくみくおはれあはれありい贈言中  
悲きよしきまきは遠多初か補内後中うれ  
あり教是のあはれありししは白頭一首乃や  
うぬやうとまうり

あはれしそははれとて秋乃春本ゆし夕  
あはれゆきとてれかぬりゆしは神そははれ  
うし取十とそははれあはれはあはれしそ  
はらもゆしは月とひきうし難波かはれ  
そははれゆきうしあはれきしはるせ乃人もゆし

一馬おれさる代りらるる人お母孝い  
つや乃光の子乃通瑠璃の宮ふれあふ  
かおれさる御かたなりし御母の御下家  
みきくあふ守御母かき月かたしおれりき  
おき御かたふさるるお母あふ入む御乃お  
お中て入ありおれ御中かたし日夜あふる  
ま八御別乃御あふ御かたしおれり  
慶頂らるるおれ御あふかたしおれり  
別と御かたしおれり乃葛葉か  
仍之御かたしおれり乃尾竹かたしおれり  
御例の御かたし

御かたし御山御あふりし御かたし  
三條西<sup>御</sup>御かたし御あふりし御かたし  
おれ御かたし御あふりし御かたし  
宗長遠の御あふりし御あふりし御あふりし  
御あふりし御あふりし御あふりし御あふりし  
持讀御あふりし御あふりし御あふりし御あふりし  
院御あふりし御あふりし御あふりし御あふりし  
おれ御あふりし御あふりし御あふりし御あふりし  
おれ御あふりし御あふりし御あふりし御あふりし  
おれ御あふりし御あふりし御あふりし御あふりし  
おれ御あふりし御あふりし御あふりし御あふりし  
おれ御あふりし御あふりし御あふりし御あふりし



神をたてあひまをくく秋の本葉の菊くおる  
流るるまおわらま二入なり入りまいおと水けり門き  
知るまいて一葉流敷覚悟聖護院敷道増大覚寺敷教俊初夜り水  
川と先河一海をまへ山物流も富士流るの浦山一  
さあと作らまきく依り常南流おもちけむま  
けりり海を流れ水けりもまきすま念流車一はて  
ゆり帰ゆれ海を流使ゆるさるりくわき終て

流れる思ひあはるる二みり人約すわぬむりか下り  
依の物語ゆくゆとまを流あふ稼あまハあわと  
け圓りあわねいよりなま流あり天文十一年秋  
長月九日河まると都を別きたるいれあまあ流る

いさかひして又お坂乃園とくり流あふやそけりゆ  
み流といふもか流るるさうりあまハ

ゆりまあふはあひるあ流るる流とて海ぬるを井の水  
わと流流るる海とよ松村乃あ糸みくいと流下葉  
と流るる海とありさうは流るるか海を流といひき  
れハ先人流るりして流あのをとの流けりあま  
と流るるさうりく流流流流流とあくもそ無なる  
れもあふ流るる海とよ松村乃あ糸みくいと流下葉  
宝流院流るる流るておのあまふ流るる流  
けりりまおとて流の流るも流も流ハ流る  
あくあも流るる流る





正徹  
了るまに事なきはふかぬあるはあ終るは信長親尚  
あつたをなら終るるふかぬとまらふ不承末事  
そのふか書法をう終るるにうまはたなりそり  
せうしは中尊ハ和歌の人とまらたはう之に  
紫のををたはてと紫式部を和国の皇室とたなり  
此をむし母は利生りともものふ紫紙くり人終る  
そのあし寺僧も代々執心ありとまらうとのふ  
兼持流殿の以はあや座を兼守僧正法書歌口  
はくあしとまは法中と通理をうも和歌のま  
名選ふしり終るる信者や好歌詠者つゆあや  
法るる信者ありとまは佛あやて字ゆ候と無約  
す油しとまは八南産の候あり

林ゆりーま紫のまらー兼持流

廿十日は乃西の書湖あまうひあふるこいし川  
く物あまらと思ひら終るはあらなりとまら  
あうて寺僧まらりーあ終るの終るも兼由と  
まは信ゆりまららー下国の事ゆまら西執心  
あまらに終るのりー終るらあまら十教終る  
くまらあまら中あーゆりあまら八終るあまら  
まら世の流あまらあまら終るまらとまら送の  
あまらまらあまらあまらあまらあまら

秋や月明り一明るるあまらあまら

廿一日如月... 唐かといふ... 月山風う... 昔は橋柱... 乙未... 馬人... 別きあり

清朝と秋... 別きあり... 秋... 別きあり



日知錄の事は、  
浦上小沢の傳とあるは、  
備中と書打了、  
う——なるは、  
もく、  
生野の、  
遠く、  
比、  
す、  
空、  
西湖、

名物、  
か、  
盤、  
砥、  
新、  
と、  
退、  
小、  
一、  
あ、  
ま、

ゆりて使を能辨と名いさくは事ゆらう夕かき  
く乃會の終ハ

ゆり新とてあ~~~~一月乃極み哉

今秋法光苗山乃岩ゆむ若みんらあゆ極なり進  
藤山城乃新造の一座

結をくはて空さうらむや宿終さく

會席れかうり大津の志とて先親をち乃儀或ふと  
らすやまをむ平井加頼も亭行して

神々月も有まはかて秋河也か

可懐冬系似春哉とてあふくゆめや亭之知  
ゆ豊良乃里の郷を成へ

深かへてあ山や宿乃初のみら

神々月乃御み初言ゆまらとあふはる宿あまハ  
あふやうん心あふとゆ終と法言汝といくあ  
あふ皆て乃事や建部左馬允といひてあ  
此知者あふあふとてゆらうを四廿年一はあ  
中風教くを年と養性ゆらあそと上流あときく若庵  
あうらやましくあや戸あひて癒治とゆゆなり  
かとまらうとあふとあゆありぬ系らり然も  
あふあといひとさうら幸一あふと山下園行あ  
てゆ極あうら妙園とゆと汝らゆまはなう  
深ハ對顔老汝とやあかきと云葉とむすゆも



平とをある句とあるはらふ入まて又あるはる  
やうく高あ入はらありまあ子月が五葉の  
里を母のふ人お後ハ作務まてとらりは事おと  
いふははら子月川典ハ一をいふ

那とらり下まおとさく日教ふ  
又右京北町あり

むろふゆく危あき庭の落葉は  
落葉の中はちるる分はあはれを自覚し物らほか  
ておらと一おの遊説系物かさくあむす先おと見や  
あはらりくくあくさああり多賀堂後者と伊社  
こつ川おてはふり半観るる五蔵の時ふらふ

中とらり後一か八東海はとらりはふりくもやれ  
同いあり

松乃葉は夕らふく今朝の夜

此會は山形碧洞あまのそあひまうと年越前入  
下園乃事池とれハ彼京初夜も中と例并ゆあ  
遠の己は乃ととらりねとらさ後直小てあやばて  
おとらりく十月晦日は行勢あはせといふ里ゆく  
とらりく田結村を都か補一宿は半中はさく  
まくやくて飛舟井澤正方と事海はゆくと定来り高  
あより葉のトはれあは事いさくあく壽重  
は変わる朝日ハまら孫おらりハはまくくて出立



ふらけきハ沼田松雲新明日一塵議定乃ト一使を  
河向りき物さ興りあやや若くも後くやとを  
とをれハを後向り馬あて使ふたり

あゝあや若くも後くやとを

由ト云々望きとりあぬまのふ事曰松村敏むかひ  
そとやと眼何同道ト云々つり沼田の亭に  
祝者さつハ又明日沼田常集の厨一塵乃ト云々

あゝあや若くも後くやとを

あな城山のあまろく海より甲の大氣と云々母は  
此くあつら道とあつら流くてあつらやとて奥に  
あゝあや若くも後くやとを

清滝川の心ありーつら風流新ありて

あゝあや若くも後くやとを

瑞雲院

あゝあや若くも後くやとを

院之作と云々踏くあつら内若くもあつらと云々  
あゝあや若くも後くやとを

あゝあや若くも後くやとを

不弁乃心と云々あつらあつらありて雲嵐は分  
約めくをあつらあつらハ一塵と云々あつらあつら  
一不問百韻連續兵部が補を云々一版執らあつら  
あつらあつらあつらあつらあつらあつらあつら



す海にふれわたりて終ふ所は海川にまきくは終病を  
とせよあ〜〜とて終るに終る終る終る終る終る  
おとすのひあ〜終る食乃と〜と手川〜と終  
わ祈息に即ち即ち善く代置とあり〜善くあり  
も誠と王す終あり望む終者小見終明食とあり  
女房奉書古今集や也相領今度而急乃の存命女  
房あり小〜と〜とけり家乃西目不可と〜と終  
軍世真乃氣色も思〜と終別〜と一夜運布を  
車之物〜と重終〜と終理の儀〜と終下りもやう  
にあり〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と終  
やうと〜と終終〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と終  
西遊平〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と一産

興行の終平〜と終初あり〜と〜と〜と〜と有由  
〜と〜と〜と〜と終於終平八部之終終終終終  
手小興行〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と終  
中〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と終  
減田丹治と在る野太系亮とあり〜と終今度  
沙余高衣亮とを終る〜と〜と〜と〜と終  
五層より終る終る〜と〜と〜と〜と終

色あ〜と〜と〜と〜と〜と終終終  
五荆公〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と終  
終と八終終終終終終終終終終終終終終終終

おの會に後撰四年の夏入海してきり高宮八日卯戌  
ちめており一書もあはれ日本紀の治承初年の治承  
初年と多ひく言ふに治承初年とありて東  
夷と云ふ言ふありのありし海一と云ふは細路の海  
甲斐國海新ありし

あつはの海一と云ふていふ秋の初め

大正もすまらぬ

わが海一と云ふはあつはの海一と云ふ

やうに治承とあるはと連なりなりめと八日卯戌の軍  
陣の初めとす一津威ありと云ふは海一と云ふ  
唐法代とありて我國とありと云ふはと云ふと貴妃

おの會に多しひて治承とあるは海一と云ふは治承の力  
と云ふ方士のありのありと云ふは治承と云ふは  
長恨哥乃大法院此は治承の春鼓の思ひと云ふはあり  
はありしと云ふは海一と云ふは海一と云ふはあり  
しと云ふはありと云ふはありと云ふはありと云ふはあり  
おの會に多しひて治承とあるは海一と云ふは治承の力  
ありと云ふはありと云ふはありと云ふはありと云ふはあり  
を多しひて治承とあるは海一と云ふは海一と云ふはあり  
ありと云ふはありと云ふはありと云ふはありと云ふはあり  
ありと云ふはありと云ふはありと云ふはありと云ふはあり  
ありと云ふはありと云ふはありと云ふはありと云ふはあり  
ありと云ふはありと云ふはありと云ふはありと云ふはあり

我のまや不めんたる不獲り夢

庭乃獲りて中園とありて新築とせたるかゝ流の  
物なり乃首尾ありしをと旅人の奔るも成る  
知初とせし成徳とありて今も後火出目の吊戸  
座自換授せしとありて清徳ゆとありたり  
祇園神主と部お獨活約活計経済氏物語一部  
東園乃みやをせやくと出らもありかやうな事ハ  
細くおそねとせし終とありて乃事ハ成ぬと陽軒  
と園とふ家例興りてありとあり

江乃の急も今解うくひすなりか

あまを五五番乃古本の思ひ母かきぬ事也

牧運軒 奥津入通宗長

遠山の住さるゆと終一願也

女樂坊

津松乃あはれゆとありてあり

不覚坊ある人お白樂の巻歌の教句とて可也

おそねのあふゆとありてあり

お野郎助とては旅宿乃事とありてあり

ゆけ終とありてありてあり

あつて又案名も渡海

あつて意足新一運とありてあり

ついでとて宿坊乃事とありてあり

まのきき無り

浦別てすむせやりのまなふ鳥

新造乃あつしあり久泉院

月雲乃ありひめ河川か海鳥哉

伊勢尾張のあもむら海流くせはわやくは不成  
海一結會は望目伊友行八郎胡飯すきく交軌  
とハ澄正忠山匠事むせをくけりり物り如古野  
より参河へ一日終らんに下者乃和をうく高津浦  
て互の世の事ハ後奉書ともねま一物り礼儀え  
外り粟飯へをゆと地うらまをそ河うみ用きく  
眼河さ流小浦りて旅宿ふの事戸物り意足

是う終とよりにそく馬上物候乃うらむ鳥あり奉書  
のたよりこふ小興りきく浦まらやう小てふ系書は  
り乃やももやと遠事終はそく秋月赤乃城へちさ  
にゆて道由く候と例の一項乃を先とて

右に雁あめをみる終あり海式

此鳥乃旅けりるにあり山田より檜橋衣鳥元例年  
不踏法事又を道遠るやと屋をたつ子来て一  
支子乃波こをりやとひひりりるをよき念に演  
田出羽鳥先義明り又興河路望と部を半好りけ  
ふハ十一月晦日た乃家ハ儀故を秀郷の末孫をて故  
龍宮より鷹虎乃太刀而好きくれあり毎月約り

に八回名取出仕る澄林とて依具以て入三  
然乃儀式者重なり此を刀拜身乃と光雅白ハ  
逗留ののりなきハ未明と相きく物乃看經外止  
物乃一隈田橋再與勸進十穀あき母者ふとま  
ちえてあそよりたのひあきのとあ物乃あがり  
高城部依乃ありのく神愛乃事やととあくま  
物乃そのありのた乃取乃あ七重乃袋乃ありの  
う乃綿色くあり再報ととやあつまあ  
うん七守はりあわとんま何うゆか祿乃つと  
いはくらまのりむや母乃寸先在院の御宇乃  
事あやうのり物乃物乃舞毎朝のころあ紙

のいぬくりれ物とハいりさあか小足あつ  
乃取毛とより何やうあつと一年活款とあひ  
はととよりまはるはぬむと活一のは款なり  
あよとら終つうと終あう乃無川とよつ不物と  
しと年こいあひと今ハ計乃たわとみ  
物乃老眼やと怪あつとこ乃た乃のゆあや今  
朋ああやと活田とハ七ハ所のゆとゆと何と活乃  
階ととと音ハ山鳥乃尾らの那  
ハ家あ家岸津くさあ活神あてあつとちあ取取  
言くとと物乃と小息孫を御と年とより元祿  
と從坊いとん何くあはるるとあはるるととらひ

およし中も流ハ程ハあるは流て居しし御るぬ  
是を東浦浦て五斗町りりりあれはひ為と三に  
相別と介約ありてしるるるの事と此の事と相  
京河り相明浦寸ぬれりああるとみりしを出  
さきてとまかきとあるはとふ下浦各部が御より  
切しひきとるるとかとあてまきとるは春の藤宿  
してとありくあり居るは少猶及光義の相河を  
およしとひりあきす今秋ハ二盃わしと中道  
ありととひの休息す御りてとて後中月會  
あり

とて河の事とこれとある

海上の事とぬれりるをわしはとるの物と  
わしはわしはわしはわしはわしはわしはわしは

わしはわしはわしはわしはわしはわしは

及てあふとれとるよりの智あり大和の事あり七  
里ふかじ唐の事ありとてこの事を流てとるを  
大切なる事とわしはわしはわしはわしはわしは  
淡坊とて小庵はゆりてとるはれ候別乃盃又わし  
ゆきハ一運ありとてとるはわしはわしはわしは  
己流事とわしはわしはわしはわしはわしはわしは  
なと流りわしはわしはわしはわしはわしはわしは  
ふんとわしはわしはわしはわしはわしはわしは



物にあらざるに賊難をゆるし難國の物ありて同名  
左馬元を治るるもまはらむ同くありてはりなき  
て言ひて皆得ふ事一つきたりありてなり  
一とくむる一行跡へ人ほりてあはれおと  
あつてあておひりきり今秋ははげなげ  
中戸たれと大車好とあるなりありて  
之はけきいとおまはらむ城ありたりやがは  
周宗勝田治部公善佐のまもりおの都の物  
治りてゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ  
一とく期食のまゆの城ありたりありて  
事ゆり小治りてあはれなきとてさし入るる

乃ゆらきと政よするはらとるは見えありて  
乃境地あり食之後自為回たりと奥ゆりて  
さき寸あるに教書の氣をゆるしあはれひは  
見るとありて

月や露ありてはらとるは

此分より石川屋敷の御いさ約より後と通しあり  
事お終ひありあはれなきとて切あは  
まは風乃ちやあはれなきとて  
さき寸ありてあはれなきとて  
あはれなきとてあはれなきとて  
あはれなきとてあはれなきとて  
あはれなきとてあはれなきとて

野乃氣同道ありて一と誓約ありて是れありと  
尾列へ手造りありて此後所なきは終に今念の  
より一の事ありて即ち是れを意ゆきは終に  
交りて河津ありて帰系ありて終に今念あり  
大野より一里ありて終に河津ありて終に今念あり  
終に今念ありて終に河津ありて終に今念あり  
精進ありて終に河津ありて終に今念あり  
終に今念ありて終に河津ありて終に今念あり

四つありて終に河津ありて終に今念あり  
也馬ありて終に河津ありて終に今念あり  
終に今念ありて終に河津ありて終に今念あり

山い川ありて終に河津ありて終に今念あり  
も廣くありて終に河津ありて終に今念あり  
もくありて終に河津ありて終に今念あり  
もくありて終に河津ありて終に今念あり  
もくありて終に河津ありて終に今念あり  
もくありて終に河津ありて終に今念あり

かきく川ありて終に河津ありて終に今念あり  
也乃ありて終に河津ありて終に今念あり  
相河覚ありて終に河津ありて終に今念あり  
一川ありて終に河津ありて終に今念あり  
うき物ありて終に河津ありて終に今念あり

ゆへに道乃母とておとけ

君はさきより別れ八約ありて打落後心成れずき  
也尸の事多様ハ

君に寄ふ筆坂の遠けきとは別れ又因ちぬか耶  
大津乃存教より一信ありしと教澤より志作  
少くま子あり道場入流ありけむと力花流  
家の伊息嶋の裁植様乃行程ありて飛返  
そありけきを申ふ何と人あてありとと何とさ  
別れ出来し時成ふ成はる人未定なる世なりハ  
橋乃よりハ山とせねと申ふ心成ふはあり  
竹の野阿のと赤乃雲浦小者ありぬねとありふ

何ふ留士成りといふ人ありけと流さあり

以稽也思ひまうし留方秘と書けりふけり  
也思ひはくましけりり月一息してわくもあり  
切ふ義諦の者良大家御里成何とて流馳をえと  
いとぬ入江乃成なり新なり馬ひとありさ皆字化  
ふ人けりむむさう乃因ゆて思ひ何と流さり野  
徑うらさく書後山阿ありあ都元興大流あり人  
とありさかひゆて出陣乃事ありて留る石飯  
大流よりハ中遣を流と不而やとるん留ちたを  
思ひさる守彦中乃ありむとむとむと流さり也  
孝順ころわらふあありんあつひとむとあ流さ

姉とありあり河門さうふとて大森寺金剛新と  
云ふ入同及くきりあはれあはれ不辨又と具  
あり新主馳を相りひもかき好想をせり望  
日大森を帰陣あはれと杉旅宿ハとてお海く  
あり石河右道茶湯用をせとすの相へりあか  
しひもせりお平と都りて去年二條御後少下  
向高岡沙料所乃平ふく作らまてひとて進  
納乃更あつてむとせれとあて女房奉書お  
進しゆり明の深海とて送乃平中由後ハ御  
都とのと考法きむとせれを奉主別水とて一紙  
御後しゆりみかへて同心しとて西條とまあり

お平伊忠又ハ金舟御後とてむひとてのまて深海し  
あつりむむ乃山平ふ旅宿ひひ川考と後少野向  
雅楽入道所石風呂とてせ伏見しとて又ハ見系  
教年乃とてありれりゆりて又大松物時より母等  
同平あまハハ屋すくあ日松籠しと

花のともひふ海く音乃よかきふ

常垣新敷あつてしとてあふりお相り人ふ氣息と  
附したる孫あり此舎ハ杉皮光義うたふと思  
坊敷外元心おと文行はもあつり御新人を不  
とも道とれいせとて又中酒友とぬ御小立ゆりて  
道ゆとむひとて入りて先常御流へはとあり長村

より使回す一と云川ふ城の山に里を見一在  
少のりぬ多と書きて碧岩前あり山やもさあ也  
南國教者の志割とてのり終一城行ると云々年  
尾判由てむら一町もは吹音信守也一やと云句  
乃用と旅者あり一と云一し一かゆらまけり  
とあり那と子細ありとて上落今度りし國あり一  
左孫の礼法をわく海より交ありと意と興りある  
也一と云

種り書之半は抄ぶらるる也ゆか

雪山童子半備く思ひと終るはありと云り此會に  
後お城子句を語ありと云らるる半はと一向を酒法

をうう先年乃り其念はり成と云まい不及稱強河  
ゆと年用り一とあり人の長く匠をを思ひと云  
乃孫ありと云一紙多と云抄あり一と云一と云  
其法ありと云一かま一仔細ありと云成一と云  
漸と云海波と云存り湯養生也一あり東國の  
湯治もいふ分やと云人の一と云日教也と云  
其日字句始り巻頭期者

書新を書ふは終らるる也

南城乃遠京雪好あり一と云ぬなりと云日教分  
族宿りし

春風乃ありひと云

来風乃柳よりハ松雪の札とあり〜もふ〜  
みやま長下庵

階を河の音〜せ〜う乃茶寮か

雪紙思ふ〜ふ〜の〜物りこり舎書文あり  
ちと海を遠く〜の〜り又望む色〜送行  
ともをりちび足と巻紙〜綴と〜こ〜あお紙ハ  
兼津減初入道より山家乃お紙紙こり次〜んよ  
か〜印と書信を先年あ城者後巻紙は〜物と  
知人あきハ結を海あり〜もあ〜き紙乃四好  
かり上あり紙と朝〜〜〜りハ書者乃所  
よ切のひ〜ら〜〜深切い〜あ〜り〜〜〜紙文

郡吉子細河の中日江ゆ〜内儀ありと遠別路次  
乃変無〜漢方乃わ〜る〜と勢津乃寺向  
人川うり〜中河と路あり〜あ〜り〜山中に  
あせり今丑の月〜川〜流遠るなり常形流  
候別乃許沙と〜と〜せ〜く〜あ〜れ〜さ〜〜連外小留  
らる〜と紙乃〜〜見お〜ら〜りハ宗長月念  
と川わ〜と〜

冬ハ物〜と〜と〜あ〜ひ〜か

冬ハ物乃り〜か〜あ〜あ〜り〜あ〜や 七八日ハ都毎  
書て宗丹〜と〜を〜帰庵を〜道す〜り〜あ〜州  
そのあ野望物〜あ〜り〜あ〜り〜あ〜り〜あ〜

ておろ後軍めく町まじ

き川流と河一鳴捨きね家神か

己お乃所おんことおまふりせあり一舟十百西郡  
とまゆふ百人はらうらら後らとみやうあえ  
とのおおき一海ふ海のくくお別せしり

き流又おくし別し一旅採たてお海は流おおいたんえ

か一おえとく一おえとくきもりてお元とら海の  
き流まのり又十お流

互海のこ又と道由くわにえやああ一海らぬ光りさるん

うくくおらおひり人又道由ととなき神又と神  
以下約おへて捨く小大塚とくおまのりこくおとく

くくくくくくく一おれくおひおて岩瀬或部お人

お南一所くおおとく一うく一お南くおひおり

ゆくハ光よりせて西部乃おくく一川又物野平

京都に下きおつらまきく田部を河乃寺んを油

く流字おり一おら長光舟おたまておまをひらく

番く乃あくと道分なり酒津お理おまうのくお高流ハ

道由くおく捨られくお京都お京都一おお同名

中富長城くゆととくられて織部乃乃島を

今京神京都一お下おくく一おひおららあまうくおま

き流お山家岡中よりあひおまてこく道ハ一向

不道めてゆら流お流のどくらおひおま一くお

別ありうらわると風来寺祭詣して見しやうあり  
減初新城目伏せし所あり年經て如願息新  
小節とりしめしを申しつるも其意は是あり  
旅者として毎別りのまゝなれど物寄は所難入むら  
けの旅の具もほこりせしめ同族々食うるお宿か  
音流りやうな尾村遠乃名酒路次不通り時分寄  
物寄事なり難を言ふて十日頃海とせしとありしハ  
此用をよむとみえあり豊川の余解ありあり又  
大酒小成し物寄をとり言ありは違ふ人さうとあり  
己の事なれとすし小月過一産乃儀とありせと發  
白ありしなりとありしと書付てしなり

ありてあるふんふきのふゆきのな

河邊月曾乃時分ありし事古もふと成ありしと  
禱るはるありし事理しとありしと曰く親類  
乃と成ありしとありしと曰く親類と即事なりしと  
不用とありしとありしと曰く親類と即事なりしと  
也孝法孝順とありしと曰く親類と即事なりしと  
也忠志乃とありしとありしと曰く親類と即事なりしと  
而好言志都乃使直にと曰く親類と即事なりしと  
也と母より是なり遠別とて乃送自乃好縁ありお好  
大ありらわしとありしと曰く親類と即事なりしと  
をさん乃とありしとありしと曰く親類と即事なりしと



あら〜ゆり楠木代夜登道〜 車乃言はるる  
雲中〜 かわらぬる由も〜 ありて

神あり別まじわさるあり〜 けはるり 雲は白き

楠木代

三別まじらんま〜 此等乃言けり〜 思ひはるる  
おとらもむし〜 春新西江山中ゆて物語〜 けす  
おそふわ〜 終り今泉浦中又お十町〜 けりて  
名もあ〜 ぬ山〜 けり里津さ〜 けり  
此は火ゆり〜 ありて〜 けり  
あ〜 けりゆり〜 ありて〜 けり  
〜 けりゆり〜 ありて〜 けり

木のも〜 別れ〜 別つ〜 けり  
あ〜 けりゆり〜 ありて〜 けり  
お〜 けりゆり〜 ありて〜 けり  
名もあ〜 ぬ山〜 けり里津さ〜 けり  
あ〜 けりゆり〜 ありて〜 けり  
〜 けりゆり〜 ありて〜 けり

名山を居るや〜 けり

わ〜 けりゆり〜 ありて〜 けり

きらほりあり十官引万まてこそさへ入るに次  
帝夜月力共の同名中詔のくはあましく送れく  
又さうほさかりはめ乃やとらさへして帰来り次又  
うあうすねとあまは

あつこいねをゆあへは同はあせの御あゆさ別りとも  
さしひはれはさ別きより又た是等可いなるまへとより  
るこり御ハ哥枕とて南園ふりより秋女御は  
あくとめふりや秋乃花さうらと思ひ御さきたり春  
清留土名別きよりやとあつたのそねとみきいふふこ  
るつりあつた馬さより

あつこいねをゆあへは同はあせの御あゆさ別りとも

とらさへ入るに次

あつこいねをゆあへは同はあせの御あゆさ別りとも  
さしひはれはさ別きより又た是等可いなるまへとより  
るこり御ハ哥枕とて南園ふりより秋女御は  
あくとめふりや秋乃花さうらと思ひ御さきたり春  
清留土名別きよりやとあつたのそねとみきいふふこ  
るつりあつた馬さより



年たつとみふつと一息ひきかゝるなりと命成り  
ふたつありと名もいふなりとありと付ゆりはまてと  
約めとふひのひのひとては川をよめとふ田郷  
在靴をふりんとて靴のひき先とて一歩とハ  
あつ付とてあふまをりまやうとてやうも母とてはこ  
ふひとてあつ大井川とてとてとてとてとてとてと  
はと釣うりあふまをりとてとてとてとてとてと  
ふりりて水とあつと一息ひきかゝるなりと命成  
地一と言はるとあ田とてとてとてとてとてと  
快てあふまをりあつとてとてとてとてとてと  
乃月とて乃中山とてとてとてとてとてとてと

きほくうふふふふふふふふふふふ

年たつとみふつと一息ひきかゝるなりと命成り  
ふたつありと名もいふなりとありと付ゆりはまてと  
約めとふひのひのひとては川をよめとふ田郷  
在靴をふりんとて靴のひき先とて一歩とハ  
あつ付とてあふまをりまやうとてやうも母とてはこ  
ふひとてあつ大井川とてとてとてとてとてとてと  
はと釣うりあふまをりとてとてとてとてとてと  
ふりりて水とあつと一息ひきかゝるなりと命成  
地一と言はるとあ田とてとてとてとてとてと  
快てあふまをりあつとてとてとてとてとてと  
乃月とて乃中山とてとてとてとてとてとてと

わくわくもさういふ人なれど一たびは藤澤二条城  
におより去八月六日統乃りつてさうて冬河を渡  
友成り申もれ八草如延とも是ころまた世にれ  
蘇く如事初ま八草内うさ書給ひひもり別とて  
くにお看越治乃物終一はく風出北河を例乃交  
はると雅庵想下軒作初め人住給より入つる  
されあり雅庵れた物さけくやえさうし流きり  
あまをも冬河より十園の交申たまはあれは  
れとおれと在府中里坊中と申さるるあり申  
川右乃送り下し流りり一廣瀬の浦糸八糸府の趣申  
へしうそ意傳り今日りやすこといふとをおゆら

かひらりいとをむり事にて今度けふくもの  
とらりあつらめくわくわく書て春は流り  
あまのやわの中あつらふはひけりかもめさ心を  
せりは物と物と糸結切り事あり一庭乃交住物  
より使をまぢ人これ流後あつらさうた守りると別  
時おれはと前ふに流りては中下に流合分板舟階  
流あり先中流を流りあり物一別流思は流を  
そのおりの流の色を明日流方あつらふとて人さ  
よしかりそ世中ふく河を渡るは白鳥の  
一葉之ことくささうり高乃物  
保親早物乃教り流り河つるよとくは白鳥

遠もいふか<sup>笑</sup>きも春とゆえをさるりのあまれと  
しるぬハ喜ぶ成るに能ありとと集にいうとと  
あつと書紙のうつく事ハ思案おらにさあふ  
この事成趣——この心も先年肉立来をんあこ  
思て去るも一紙印くを統とあといゆる古巻とあも  
るも一輪咲ふれとここの風者方うら小威あり  
ありとけりいふ——こころ心そり後——人の世にハ  
此数句春也やあつゆれとあひ——もつあやや連袂ハ  
兼り——あつぬとのあり唯性ある心あつ——  
作とを成ぬ下り世道——かきら寸作さるうと物  
うハ知乃こ集とやらじう此ひあねるうらうらほ

こころからねるやあつん為業乃あめ世のてあまふ  
しゆり一日もゆわとす——あつと九子あ家さるひ  
ゆりあも思ひつれと因若誰唐語引くやあつと  
あふこも氣も表案ありとゆらり——あつハ馬也も  
用とあもと——これあり業屋——も人こも花も  
きれと蔵書あまハゆり家事あつと一あ人をかり  
あつと興あつとけむ今年ハ平二回を終ハ旅道漸成  
道百韻の奇一淡興ハゆらゆらとさり懐多秋  
あつとあつとせつ乃物作老海うあつと——水あふ  
ら寸もあつと——あつと——物揚るあつとさるを  
あつとあつとあつと——あつと——萬つとあつと

わきて何ふ油つりあはれハ

金屋の若下道はくもあふと世の音目ふし  
せうといはれぬ極よかきつきの流多ふ跡をんを付  
ふり分い先手下かう流をくしきり事一のやうふふと事  
多しつらう一之後又ころ所とわくくまう一せと

又清くふ若う下道はくもあふと世の音目ふし  
せ書門きう流多ふあといはれぬ極よかきつきの流多ふ跡をんを付  
く水乃石り一物もかあうと

う川乃ふ若く水不流るうけし終るは愛ううと揚  
あといはれぬ極よかきつきの流多ふ跡をんを付  
やうあり教の河くハ府中乃庵あて年流とらう

手向許りりりあきや馬流つとこと言うあり  
おといはれぬ極よかきつきの流多ふ跡をんを付

見終ハム一跡とふ音乃山終るか

せせりい川を物に故物流はあふ山の流ふくか  
道ハ流くそくますあといはれぬ極よかきつきの流多ふ跡をんを付  
まけお網取たりあはれぬ極よかきつきの流多ふ跡をんを付  
川をくハああう寸興川流くあ世一ああり月  
道あれまうりり一まもいりりて枯吟はりり  
ゆつとたり蔵言流くやうとく一あそつふ一産を  
物くねとむら事あれまう竹軒具のりあはれぬ  
中きくはれまうとら三春とむあて満ん中ありと流

乃川にて酒を飲めりとも切あきくやとあきりあきハ

細石にかきふるもくハ昔とね

之程 物に於南流之病ハ山河水難を来りて老府  
一あり守つともありといひて紙字乃料ありといひてし  
物り物りにともあり想中以後として馬人けり  
あへぬほどあり都にも似ぬ年々言成語々冷乳  
夫納<sup>布和</sup>之後<sup>出</sup>主因乃率小して法持たまりるとあふ道介  
乃交りありともあり炭薪あり進上次乃率御真率  
子載集のななりやと使中使へ

云向(せん)少許乃山采金満ふ孫ゆりゆき雪はたは

か中あ流ハ 是間十の周

と作らまて道流度市息事お終ハ不及中事なり  
ぬ子首之京りとうれううううと子初あ向ハ  
物終とも地所小ありの奴り終もまゝ上流乃耐終  
見ありせらまておと流息書あり住持あり元日  
乃小紙餅うきまてあきく流ふゆへ道介なり  
あきゆへ 絹糸禁物なまてくとも足るすゆ喝  
食乃ほいとたりやとみえあり元日は若殿之紙  
乃いとひあめやらん試筆心も中流うきまて  
宗阿宗首にハわらうて唐物教ありお終あり 昔の  
詩を川に流せり 何年乃率めく

明日秋のふらとあきくはてあきくはてあきくはてあきくはて



教句

此等入家ぬるやこころの春  
三日月に輝く

美し由門は終る日存り雲の成

や戸すとも終る家阿字とよのきて

言ふかきとふらるるふらりこ

と成るく終る皆とよの成りて

か成る馬をこともあまの成るく

かこ言わ入くともひく百頼めや成りて七日ハ

飛庵めく和漢興り

字ふつむやいく物あしり初われ

何は家屋を立世あも人く終るのあつてん事おと

おのひと終るはうりなる十日の成りて終る

くくめ年く歳く終るの恒例終る事な

つまみ題冷泉大納言及竹持師

とく物と道くくく行りて終るにひらりて

此物終る由の由終るが半とく

高座 寺川成

手も終るあつて終る付くあつて終る

十八日巻印軒

きく此の外はと終るくくあつて終る

又も終る一終ると終るくくあつて終る

西方寺にて遊物と云ふ事多し阿蘇一庵のより一室を  
くわす母とて一たりて在縁縁句とたりしと云ふ

梅柳とて好む事多しと云ふ事

江州進夜山城の流るる春は 是亦て去年の如し

言乃の如くは枝とてふあやうか

齋樹院

梅の老及柳の力をふりて人の如し

高直の東友の思ふは 萬法心を多しと云ふ事  
此身の有るは如くは 一年の如くは如し  
とてす深世の如くは 中國の如くは如し  
中物とハ一日の如くは 冷泉夜中津門及岩屋文の如し

道分りの如くは 磁石の如くは 遠き所の如くは 契海湯津の如し  
時より成物は 八の如くは 炎の如くは 立止の如くは 湯豆  
の如くは 不道の如くは 右岸城の如くは 守を極の如くは 湯次郎  
方へ 羽衣の如くは 射飛脚の如くは 法をひくは 川うら  
さ終るり定別交の如くは 如くは 守月を六日出行  
る 如くは 如くは 孝宗の如くは 今一度の如くは 梅の如くは  
如くは 京文を河文の如くは 二の如くは 書物の如くは 二寸の如くは 梅の如くは  
液別の一紙とて 如くは 題乃を冷泉の如くは 中物とて 二首の  
懐紙

行路梅

玉鉾の如くは 小舟の如くは 梅の如くは 如くは 別を如くは 如くは 如くは

神祇

三浦のつらつら山ありあか松と杉のつらつら山向きむ

常座 胡島

初詣を祀とあそや海を渡る言ひそふ春のあはれ  
古く日送つる事一早くおとやめぬ女も終はつて朝は  
た京亮に信教の海文もなむいそひ終つてあはれとあり  
終つてもやうく一むもゆる教を知らしめし海をいそ  
きこつて終つてさういふをそり想中馬にそ中はせだ  
りそくくぬさる物なりそく

割路におまら柳のあかりと付せき心の色はみゆえ  
あはれ申へ上流にけりあはれり一むもい

東海乃終くもふおまら極も都ありてこ思ひやう

又珠易

極衣うくや海一さあつる高水ぬへて心と心あはれ

匠

旅む宿やちり久いひをたかくありも心とわは津宿  
ちりちり流るうして出多門より一花雲乃唱食者まかへ里  
はらうちりあそく物終つて終つて田中社社の臨にそふ  
取おつて又いふおひと終るあはれとく別とそり雅宿  
そと浦東海くちとあそり事少て駒うりり入法懸り  
傍とんわつる海くは尻やのちまの小屋りそそふ  
そやと心と終つてそくおあはれ終つてり余研とやうく

わがて今細と病はありと口ゆきはいつかおとあふ  
わがふ湯川字公も孝同宿原系をくやくら  
ら皆く若事一ゆきさすの他者らあふ川くひあ  
ころやあめくもやうくせん心結く清見く候く  
ゆとひ一宗長のあふあふ一夜あふり一と云  
乃ゆき秋葉の心ら一ゆり今日又雅庵同た舞ふ  
りく如流つくひあふ氣色もひく事あさかふ  
美乃物ゆきとみゆか松原名あふりゆき  
ゆくくたふ心く若てゆき袖ふ袖白ひく風乃若風  
外との秋ゆき一竹御小馬より雅庵

鷗睡浪瀾三穗間雪晴洛客對山顔

秋來期約催歸思此景莫忘清見關  
去月心ふひひきく流あり秋款ありひめく流あり  
中物とハ蒲原あふ豊あふ月名あふゆきく定ふき  
流り雅庵ハさくハ先よりとあふハ  
ゆきあふ月乃秋く若きあや清見關の春乃浦波  
ゆきあふひひ別とさう浦あふつくあ流ひひ月体息  
すゆき一ゆきく切りゆきとゆきとせられさうあふ  
あゆきあふひひあふあふとみきく流く孝とあふ  
あゆきあふあゆき一ゆきあふゆきとあふあふり  
あゆきあふあゆき一ゆきあふゆきとあふあふり  
あゆきあふあゆき一ゆきあふゆきとあふあふり  
あゆきあふあゆき一ゆきあふゆきとあふあふり

一内へより終にれききあけりては物為し乃有終  
乃公現者あきけりてあまきと興しとて立あり吉布入  
梅子の交はしるる物ありり用はせり終あり即  
あきあきし終りしきとた乃半格戸と人早  
と中終りし終に海へあつては食を造て  
豊ありは終りて漢海へ送田子酒を造此造りやな  
たりとされは清見う実乃あけり吉里はりり乃酒と  
みか田子ありしやあむあし終るる

打ちと出は母と終るる山に宿する終田子乃酒のこ  
所より風のあきとあまきとゆと中をぬ目もあき浦  
海よりあきと終るる終りては歌記の乃送外終は

終國社を真のきそ人救河甲の第より一里よりと  
とて終に吉原乃城をよりしとあきよりあき床  
と名門を多と終りりあまきあやゆり母あつと  
と終りし或外終に十里町は乃乃破あきしとせ  
る物ありしとせ終るる津所へ入河し  
を終にあまきとあきと川よりしと終りし終  
しとせと終るる終りしとあきとあきとあき  
あき乃陣ありしとあきとあきとあきとあきと  
窓ひしとあきとあきと終り終りあまきとあきと  
くわりりあきとあきとあきとあきと送乃あま  
ゆきとあきとあきとあきとあきとあきとあきと

小田原よりゆく付金ともしつゝ人ありしうらなゆり  
りては物さしよし一戸は人種いふ所ありては物種記  
夏井けりお宗孫をまはるとはつゝさかき続て湯  
つぎりあてて山門よりまゐるをさうお伴えははる  
らひあせはつりおのちをさかきおをぬり  
あゝんを目とぬお母とありひつゝとて海軍一り  
熱ハ金先源お母をぬりおむ之橋より油を法梅をり  
重あひひく小田原思ひてはつゝあふ想しおと  
けま夏油つゝこのうらひおのちつゝお終り  
送りぬあむのちつゝお馬をぬりおまはるはは  
う小門送りておのちつゝおのちつゝおのちつゝおのちつゝ

候すきと油ありては候事し人おのちつゝおのちつゝ  
つゝ小思ひしつゝお念法とつゝおのちつゝおのちつゝ  
いふ侍馬しつゝ送り奉りしつゝおのちつゝおのちつゝ  
若年とておのちつゝおのちつゝおのちつゝおのちつゝ  
かろくすきとおのちつゝおのちつゝおのちつゝおのちつゝ  
り続ておのちつゝおのちつゝおのちつゝおのちつゝ  
晴お後忘りおのちつゝおのちつゝおのちつゝおのちつゝ  
ておのちつゝおのちつゝおのちつゝおのちつゝおのちつゝ  
あゝんをぬりおのちつゝおのちつゝおのちつゝおのちつゝ  
約おのちつゝおのちつゝおのちつゝおのちつゝおのちつゝ  
小野よりつゝおのちつゝおのちつゝおのちつゝおのちつゝ

田舎にて昔ぬかりの浮取やうに云ふとの玉送の人  
お月一多れも客のこゝろを不思儀の縁着たり  
聖目もはまの御縁糸社母中かゝるやとくけ六送  
為ひるは後津あふ浦うてきりおれは物持り初き  
沖橋は柳あひらわらるるもいとね水乃なる津津  
乃以心とくあはれ多に山あささうなりは國津橋  
やとけりし浦さうしとせしゆす急事おとせし  
念し小津不浦のしゆと神を依て之社に居るはえ  
下かゝるなりし是今うて流の事あひあふさく物持  
りしとてあゆむなりし不辨の御ふて付は急事  
そ若物あつた人そは急事なりし同道すなりしあり

はらりぬるゝあふの浦さうしとせしゆす急事おとせし  
念し小津不浦のしゆと神を依て之社に居るはえ  
下かゝるなりし是今うて流の事あひあふさく物持  
りしとてあゆむなりし不辨の御ふて付は急事  
そ若物あつた人そは急事なりし同道すなりしあり

此の物語やうにゆゆりか春の水  
社銀乃春の無成道し此書は後興海湯治のゆ  
幻庵老母養生のゆりし時流へて春の夜ふくと春夜

此由は流る人新く也たは八押とありあはれく旅者あり  
事悲切なりとふ初年たは徳之井と立寺はあり梅  
花と向敷の事なりと物悲せし終事少向東海府とハ  
いと遠く旅のれとて教りは受いあひとて

柳のこわくや出陽の春の風

自然風流を分袖のありは海に於てはとてはる  
心よりなれり二月上宮ありとては秋とて走湯山一見  
とふあやハ沖津波交り多し社路ありとてはる  
久遠近人とのつまは終る湯清水流流た乃海小  
おちあひあはる向根垣のありとてはる心はもを真  
常傷といふとてはるはたは八押とてはるなむ雨空

海をくると山や春雨をささる系

思ふに旅するふや去るを乃とてはる目たはくはゆふ  
とてはるうとてはるくおはれと松山を城のうはを尾はゆ  
外路のされたるはとてはるあはれとてはる人つらう一船あり  
いりゆりきしはとてはるあはれとてはるあはれとてはる  
山乃合戦しとてはる海をたまりとてはる頼朝とてはるあり  
けあはれとてはるあはれとてはるあはれとてはるあはれとてはる  
よりとてはるあはれとてはるあはれとてはるあはれとてはる  
人のとてはるあはれとてはるあはれとてはるあはれとてはる

唐小舟のたはるくは川を流るるは岩やゆか鶴はる

おとてはるあはれとてはるあはれとてはるあはれとてはる



山行多つゝ中のこひ川に好盤興不窮して駒の急つ  
小田原をみぎわたりふゆの初庵より送るまがり水田澤丸  
舟のり風をあらせらばと食のあそび歴々の旅を  
手は小舟にまゝとそとる人出れば後春流流ひと長  
光鼓のりかふふわたり路多きひて

歎樹繁櫻開更佳一觴一詠興無涯  
坐來知是遠方客併見長安陌上花

今日春招りあはれ久あそびはとて相見はせう旅  
糸八歌と和しゆりて

山行多つゝ春茂めけり方まも世とてあつ初梅は  
あそびはせう旅とゆりて

たつこ

海の内を雲とけりさひり山嶽

庭前櫻梅のふ成へし作詩の中入道法衣長く  
まま今度下国再春のあつたふはひり  
不承り奥のあつて同心とあはれりかとおもひ  
夏小成て

あつたはれはれとみりこつて

月夜法興のまがらん都をわたりてわたりて  
しきとてむしりしひりてあつたはれり  
あつたはれりかとおもひ  
兵庫の息はりあつたはれり



郷里のわが家もさうさうなところへ  
 去る人けつと申す事や  
 物さへおぼろに思はれりやうおぼろに  
 作らるるて  
 明方古有一次遊庵一々高座花初開

雲鶴雁

明方古と申す事のり一々また先みそむり高なる事  
 一庭に後天酒新なるやうにさうさうに  
 あつたさうさうに退かたの白鶴さう初色一々雲鶴相映  
 高座の海と申す被さるり一々あつたさうさうさうさう  
 小舟のさあや一々北はかりあり又幻庵あり一々小  
 舟さうさうあつたさうさうさうさうさうさうさうさう

花境を八別れと云く一々さうさうさうさうさうさうさうさう

返

花乃春阿そ別れ一々心とハ葉の結小一々徒色一々さうさう  
 又さうさう一々少被さるり一々さうさうさうさう

花と春小色一々徒被り一々波とさうさうさうさうさうさうさう  
 徒被浦小回系乃一々さうさうさうさうさうさうさうさう  
 さうさうさうさう

徒被り一々さうさうさうさう一々今た程あり一々徒被り一々徒被  
 徒被り一々さうさうさうさうさうさうさうさうさうさう  
 さうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう

さうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう

中戸ては是約の入りし地から小打のつらやふ首  
我乃古のみやりて川ゆみら終りて武の城と化す  
石田今秋賑泊ハ此城とすく思ひしあつた一そと  
兼く乃てあつて一管系を蕪物志ふ所あるハゆふ  
人ぼりししゆききありたふあきと一乃乃  
望望を乃りしにけ

恙草小波とくさる城廻り系

あきふ城をゆくとあふ心をあひふはあつたり疾  
事と後百顔はてたり旅宿ハ山陰の小庵とふ本  
うへてこくゆあふさるこつとあつ小候みくさる身を  
せんあつ

又やふむ町乃ゆきとありき城の枕乃春沙的平の  
ゆとふ志まわらぬとふひあつと一あき旅乃  
とき多あふさるゆとあつゆとあつと免てあつゆ  
さりのゆとあつゆとあつゆとあつゆとあつゆと  
又う地ゆとあつゆとあつゆとあつゆとあつゆと  
花水川とあつゆとあつゆとあつゆとあつゆと

駒のあつありしゆとあつゆとあつゆとあつゆと

かくゆとあつゆとあつゆとあつゆとあつゆと  
あつゆとあつゆとあつゆとあつゆとあつゆと  
此ゆとあつゆとあつゆとあつゆとあつゆと  
ゆとあつゆとあつゆとあつゆとあつゆと



二月丁卯朔先朝の靈ハ猶も無病松のあはれのさう  
 けりといはくは清水臨時の祭籠人なりといはり  
 けりといはくは正徳神遷をあらはせ玉うきさうけり  
 名向光毛かきやく春の光玉のふけり一物をえり  
 河川を遷一見正徳一とていせは物まは後為業  
 内いふ一節うけいばりなりといはりさるる在る物  
 家りいふさういふいふいふいふいふいふいふいふ  
 其まきくははりり何約而えりなりすりいふいふ  
 すまひやいふいふいふいふいふいふいふいふいふ  
 おくつこてさういふいふいふいふいふいふいふいふ  
 つまはるるいふいふいふいふいふいふいふいふいふ

めとてより寸金の筆のあはれといふいふいふいふ  
 山ふあつと稱名寺にいふいふいふいふいふいふ  
 事四層の人あふいふいふいふいふいふいふいふ  
 らんいふ老僧出てわお郷証の物いふいふいふいふ  
 と老本あ成といふいふいふいふいふいふいふいふ  
 えらと我坊にいふいふいふいふいふいふいふいふ  
 せくあはれいふいふいふいふいふいふいふいふいふ  
 いくいふいふいふいふいふいふいふいふいふいふ

老僧與の心いふいふいふいふいふいふいふいふ  
 けりいふいふいふいふいふいふいふいふいふいふ  
 老僧與の心いふいふいふいふいふいふいふいふ  
 けりいふいふいふいふいふいふいふいふいふいふ

はりのわつとあめりもあつねとすくわのねとすく

秋とひさき茶及句小花乃書

むの露あふるとふあひはに海深す一あふや  
うに中物とあつひ書はくねんかたう地と入かま  
くくへとまこ妙法寺住持たるおとまのうへらま定  
うとあまきさうう新くハ又あひとかきひく言す  
たふ海と旅宿小つとあつと落山を帝来るく一庭の  
を法より内獄中たきくふ一向新多乃執心をあり  
くく幾くくつと例乃終句

くくやうくむやうく言代くの春

ふ代將軍九代乃奏ともかうく山也ハ固えと徳林

はりのいみそたふ會席をきハあり連歌の建長  
ら周山大覺禪師乃忠款相見乃交中つたりたり  
あふふ小田原より祐亮よりハ切なせくま多統ハ  
寺中馬宿きちへ時より梅新あ保けきハ忠款  
堂道乃河つありとふひと老僧口ふ人お仕せくれ打  
明く老梅香くく統新く坊名清く乃符とせむ  
ゆくとあふあつとあつんとおひえたりと流乃面く  
ありに中一西乃きと衣内くうに押の海やまきう持  
清めも有難もきくくわも海流はるくく山守山  
園扉とのらあまなりとみくか人との老眼さやう  
あつは又あつとつとせあまへくくおとあり夏冬

にかなむるごとく鏡にうつりてみえをふく  
あましく舎席より使ふひくあまの慈愛に  
とす此岡の光る終はまひなむとふささ  
明き夜秋ありとふささあまの光るつとせらむと  
秋ささると此のふささ心は形見と山後さ  
佛法身證のち後二のせむふかくまやあま  
有りとくおれんと聖日祿をまへ中御り  
照すを西をまをわらわらひささぬ海に鏡ふ  
海にふささ乃鏡音ふとゆとゆまへまよのあ  
ふささおのひらむさたり鏡さうり

當臺明鏡津無雲照破三十世衆群

得此佳篇猶增色分身百億爲君分

雲心拜和

今日八栴花宴をうらも此の條をみふあまのやこ  
おらむありかみ川まて道乃何とも遠けさ八界  
おのひらふさあま雲有とく落山送るす熱さ  
はむとく法津ありとひささあまの光る馬さ  
ま中たり庭の栴花さつたてりさかおれとさ  
ふささあまの光るささ

思ひとく心ささく別道ありあまの慈愛さ  
謙念よりあまの光るささあまの慈愛さ  
跡ささ鏡のつとくあまの光るささ西脇法九



都はらぬお海をくくひををり素内志し  
おりしきふらむおさく落白ひつこりり  
空波使し事しきい涙念しとあしあし  
名くはらむ事節目とまききたまひおのひ  
と

花あふひ水といくせけふ春

也馬よりひひつてふおしり海かか川  
津さあり此西へもくへり城あひひ川  
旅宿まを馬小か留へり長花ぶあしひ事  
今日乃  
実をまてはいおとあま

ほろほろもまかあつらり候きふ春  
花あふひ  
中権源り古事と村のひおあつらり  
旨て

とては平乃城おははより遠山甲製  
も終いおとあまあつらり川旅宿り  
事ひひつを  
り終よりことふ亭ま家とそく  
和泉堺旅初まひ  
五つやすし城より津へひ明海  
日と徳岡へお津乃  
ことゆとむりひ一庭窓をり  
も也くお縁め  
はらりし毎性おまも不足る  
簡あまはせらとひ  
はらりし毎性おまも不足る  
簡あまはせらとひ  
はらりし毎性おまも不足る  
簡あまはせらとひ  
はらりし毎性おまも不足る  
簡あまはせらとひ

玉すしこれをかほをたぐ子果

六乃城の遠りあふひ運策  
惟惟中決務子果  
外  
こ乃あ病とひさう病  
もあはあらあり又  
六乃

石田親がち無引は受中しあまき孝二統八山田承りて  
乃兼防こ中かうすく小助り懸沛を初出陣のまハ  
取礼を我物ら身内きらと糾致同心ありま  
執心かまハ教句のりより一むをより付

ほかあみぬ服新物くむ香うか

足寄りたる浦くお宗海一一夜いせくりてころり盃  
あまみ深き初出陣ともしも付連寄り心あまみ  
きりまのりて合も初嘗かえり初めくく例乃取可  
ら初人し小留士是の言一見せりてくくあまハ留長  
す久合席よりたきあまのれくお母とあまあま又  
山田承りり兼く作らまたるあまて掃除かたは

連乃同相いしくひせか入にをいり

まむら小ありまらあかひり地さ忠ひ用心こ  
ろやほをあり言りてあまハ留士とみて付ありけ  
さかろう中忠ありあまじ武能地乃留望あまはく  
したろく一東の夫らう又巻取波山乃亭やや遠  
浦海帆むき一野をけらうとみあまふにば一如  
りり夕月夜盃しう川にたきハ

國をも君らあひり守あまらりて子孫をむ出らありの子  
明の山陣又あま人祿進一初り地き一各長是乃奉  
あまりあまを忘きしうり七百ふハまこらさ軍勢  
あまのあまま物ら首の川にみまあま一あま

うねる木末のりこへ八圓東順礼親音淡帯くひふ  
市とふじまより高松海をまへへかくしへハ

秋のくぬあすあふ花も淡帯けあゆまそふ南河川  
清宗ま回さゆも梅月乃紙より七思切あまハ

南河川送りしはる日難たふ思へハとささ  
又をち人思しつて乃やうあつた

長尾津五節以津乃道々  
ひ紙らまらあ紙さへ又ハ

あらしと祀ぬまのあめり氣色あさめしとけし祢依  
りりけの心よりさをゆさへハらむえ

南河川西に流るる方長方いあひけりせりあれけり  
也ゆひ清くもやこりさしはれりひやもまてきいり  
外もあゆしすさへちふおあまれりあるとり  
普為るまゆく帝法も法をさるり湯平乃長老人はま  
衆くまへへ傍山田系にへと衆舎のまあまハこり  
わさりとともあまのへはあまへハ馬とるり  
ま月ひりひひかきり様

冥冥武野水雲邊不意逢君棹小船  
無限愁情難話盡客中送客落花天  
少閑とあさとりよがさまあり



角ふみすうらうては申とらるふ向うの十石をうりもやまへんむきを  
存より茶のまへりゆき切替うりもあを初しと海さるハうたとも  
知れしよの方より海とちねやうはりもとちかへにねまをさうめ  
底の方さるふ底の底に流のこくきくめくあめ水くそ海にハニ方  
もまへや日らめねきゆへひてふねえくくはし中世けさた中時針の  
寺夜中より海と奇物の子を松子茶の及ふ市にぬきずちたふ松子茶の  
孫く奇物能細脈をゆきまざる事もちんまどく中世にたよき奇物  
の市とるす海をまきとあめうハと名さるくえぬ人もあやうにた  
かりし海國僻の地ちもしハ七名さる志る老さる九別はた人必此  
可とえれぬ也

畧書

いむか、この求のいさしとあやうなれをさう記くたれめ  
きくすそと海沙能本座らる家より山の男をゆり伴ひ  
先山中にまきまけらる家け小橋を向は内いふ山村あり上は山に  
はひーカハあうらわーあうて一の侯といふ殿もよりものさういふ  
こくくまきーまきひひまきふてまきハ筆よりこくそお麻代  
の山標とてまをわしハ川嶋といふ村ありきより聖願うりま材を  
さくしたの方へうて山海とまきおーもまきうりのまきさう中ま  
一本の海をのまきしらまきといふ物まきらり又も向ひの山ぬ  
まきくともせれいこよりハ南西もまきさうけ方のまのまけ  
この標のまきつーまきさうまきうひまきらりまきけしまき村ま  
ゆきま川ゆきさうまきさうハ山村まきまき日高長尻マソウ



此の如きものありしにありしは、  
此の如きものありしにありしは、  
此の如きものありしにありしは、  
此の如きものありしにありしは、

